

衛生

豚コレラの症状と予防

藤原若彦

豚の伝染病には非常に多くのものがありますが、一番養豚家を悩まし且つ被害の大きいのはやはり豚コレラでしょう。

最近のように急速に頭数が増加し、飼養形態が多頭化するにつれて豚や、豚コレラの病原体の移動も頻繁化し、豚コレラの発生の機会も多くなり被害が大きくなることも容易に想像されます。

岡山県では過去3ヵ年引続いて発生があり、本年2月児島市に発生し、倉敷市、玉島市、玉野市にもまん延して、へい死し、或は殺処分されましたが、最近における発生の状況を見ますと常在化の傾向が非常に強く、いつ発生を見るか予断を許しません。過去における発生状況から見ますと、大体5年おきに大発生があり、丁度本年はその5年目に当たっておりますので、養豚家の方々は特に十分に注意していただきたいと思えます。

症状

豚コレラの症状は必ずしも一定して現われるものではありませんが、一応甚急性、急性、慢性の3型に分けられます。

甚急性のものは明らかな症状を示さず、一朝にして急死するもので非常に診断が困難です。

急性型では高熱（40度C以上）を出し、食欲は全くなくなりますが、水だけは非常によく飲みます。耳根部、下腹部脚の下の方等に紫斑（紫色で指で押しても変色しない）が出たり、眼やにや鼻汁を出し、次第に元気がなくなり、豚舎の隅にうづくまるようになります。また歩様がふらふらしたり、後軀麻痺により起てなくなったりします。便は最初便秘し、下痢に変わって来ます。大体10～20日位の経過で死亡します。

慢性型のものとは従来極めて少ないと言われておりましたが、最近ではこの型に属するものが多いようで、主な症状としては少々元気がなくなり食欲不振（一進一退）熱の弛張、眼やに、鼻汁、咳、時に嘔吐し、便はやはり便秘から下痢に変わります。紫斑は

死ぬ少し前までほとんど認められません。栄養は次第に悪くなり経過も非常に長いようです。この型の豚は長期間ウイルスを排出（尿、糞その他あらゆる排泄物に含まれる）しますので、防疫上一番やっかいな存在で、特に十分注意を払い、このような症状のあるものは出来るだけ早く殺処分（法例殺）し、病原体の散逸を防ぐ必要があります。また脳炎様症状は病豚の約70%に認められ、旋廻運動や癲癇様の発作の出るものもあります。豚で熱が高く神経症状の出るものは、豚コレラ以外には無いとまで言われています。

予防

豚コレラの予防には何んと言っても予防注射が第一で、予防注射も大変多くありますが、豚コレラの予防注射程よく動くものではありませんので、先ず予防注射を受けることが必要です。子豚の予防注射の時期は原則として生後50～60日で、必らず離乳した後15日位経っていることが必要です。やむを得ず離乳前に注射を受ける場合は、注射後2ヵ月以内に必ず補強注射を受けることが大切です。また種雄豚、繁殖雌豚については、予防注射の有効期間が6ヵ月ですから、年2回家畜保健衛生所で予防注射を受けて、安心して豚が飼えるようにしてください。

次に、一般飼養管理について豚コレラ予防のために注意しなければならないことは、病原体を持ち運ぶ危険の多い家畜商の出入りや、発生農家への出入等を厳重に注意し、少なくとも豚舎の出入り口には必ず手足の消毒の出来る消毒槽等を設け、また無用の出入りを禁じなければなりません。

豚の飼料として、残飯等を利用するときは必ず煮沸して与えることが大切で、これらのものから豚コレラが流行した事例は非常に多いので、特に注意を払うことが必要でしょう。

次に、新たに豚を導入する場合の注意として、先ず導入豚は予防注射を接種して少なくとも2週間以上を経過して、豚コレラに対する免疫が完全にでき

岡山畜産便り 1963.08

上っているものを購入すべきです。注射済の豚は赤色または緑の耳標を耳につけております。(耳は4月から9月までに予防注射をうけたもの、赤は10月から翌年の3月までに予防注射をうけたもので、岡山県の場合は片側に岡Aまたは岡B、その反対側に県下一連の番号が入っています。) こうした豚を選定し導入した場合、いきなり健康豚舎へ入れず、必ず一定期間(2～3週間)観察豚舎に入れて観察し、健康であることを確かめて後始めて健康豚舎に入れるようにしましょう。また観察期間後に補強注射を受ければ完璧の予防ができます。特に離乳前注射かどうか不明のときは必ず補強注射を受けることが大切です。

なお豚コレラを防あつする上に非常に大切なことは、病気に罹った場合や、へい死した場合の届出で、一たん病気になった場合は余り素人療法をせず、関係方面に連絡して診断を受け、また死んだ場合は役場か組合、或は家畜保健衛生所へ連絡し、その原因を確かめ、予防に万全を期するよう特に御協力をお願いします。

(畜産課技師)